

## ウガリト語研究(2)

—ウガリト語における連声 (Sandhi) について\*—

津村俊夫

連声 (Sandhi) とは、サンスクリット語で「つなぎ合わせる、結合する」を意味し、「ある種の単語、形態素、あるいは連辞の初頭および（あるいは）末尾に影響を与える音声的変容」のことを言う<sup>1)</sup>。たとえば、

(1) a book~an old book

における an は、a と old との間（すなわち境界<sup>2)</sup>）における母音連声 ( $V_1+V_2$ ) の結果生じた連声形である。Bloomfield は、このような現象を強制的連声 (compulsory sandhi) と呼び、

(2) did you? [ˈdid juw?]

の連声形 [ˈdɪgɪwʔ] のような随意連声 (optional sandhi) と区別している<sup>3)</sup>。連声には、上の an の場合 (1) のように、1つ（またはそれ以上）の音素が「付加」されるような例だけではなく、(2) の場合のように、全く異なる音素によって「代替」されたり、あるいは1つ（またはそれ以上）の音素が「脱落」するような場合もある<sup>4)</sup>。

このように、連声現象は、境界 (+) の直前と直後の二つの音素間における「音韻的調節<sup>5)</sup>」のことであるから、上の (1), (2) のような、母音と母音の結合 ( $V_1+V_2$ ) や子音と子音の結合 ( $C_1+C_2$ ) の場合だけでなく、母音と子音の結合 ( $V+C$  または  $C+V$ ) によるものもある<sup>6)</sup>。本論文では、ウガリト語における母音連声 ( $V_1+V_2$ ) の場合のみを考察したいと思う。

\* \* \*

P.H. Matthews は最近の著者『形態論』(1974) の第 VI 章で、“Sandhi”を詳しく論じている<sup>7)</sup>。そのなかで、現代ギリシヤ語における、所謂「母音字省略」‘elision’の問題を扱っている。この‘elision’という現象は、一般に「語境界に見られる結合音声学的現象（連声）の1つで、末尾無強勢母音が、後続語の母音初頭音の前で省略されること<sup>8)</sup>」と説明される。しかしながら、Matthews が指摘しているように、次のような例では、「末尾無強勢母音……

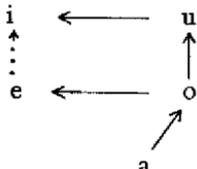
省略」は必ずしも生起していない。

- (3) to+ákusa → tákusa  
 ta+évlepa → távlepa  
 ta+arxéa → tarxéa  
 to+éleya → tóleya  
 tu+éleya → túleya

Matthews は、伝統的に「母音字省略」'elision' と呼ばれている連声現象が、必ずしも母音音素 ( $V_1$ ) の「喪失」とか「脱落」ではなく、 $V_1+V_2$  において二母音間に「隔合」(fusion) が起こり、より強い母音が (より弱い) 他方の母音を「のみ込んだ」('swallows up') のだと説明する<sup>9)</sup>。すなわち

- (3a) o+a → a  
 a+e → a  
 a+a → a  
 o+e → o  
 u+e → u

のように、現代ギリシヤ語の母音連声  $V_1+V_2$  の場合、母音の「位置」(position) —  $V_1$  か  $V_2$  — が重要なのではなく、その「強さ」(dominance) が、この現象にとって決定的な要因になっているというわけである。これを一般化して表現しなれば、「後舌母音 (o または u) は前舌母音 (e または i) より強く、中舌母音は閉口母音より強い」となろう。Matthews はこの母音の「強さ」(dominance) の相関々係を次のように図式化している。

- (4) 
(a → o は a が o より強いことを意味する。ただし、i と e の関係は不確か。)

このことは、別の角度から見るならば、「共鳴度がより大きい開口母音と後舌母音が、共鳴度がより小さい中舌・閉口母音と前舌母音とを『見方に引き入れる』'win over'<sup>10)</sup>」ことを意味する。以上のように、母音の「強さ」が関わっているような連声現象を次のように定式化することができるであろう。

- (5)  $V_1+V_2 \longrightarrow \left\{ \begin{array}{l} V_1 \\ V_2 \end{array} \right\}$  ( $V_1, V_2$  のうち強い方)
- \*       \*       \*

さて、上のような、語境界における母音連声は、古代セム語の一つであるアッカド語の楔形・音節文字テキストの正書法のうちにも、非常にまれではあるが認められる。たしかに、E. Reiner が指摘するように、古代の書記は、その伝統的正書法に従って、通常は、おのおのの語が独立した単位となるように書くことを求められていたので、語境界における「形態音韻論的变化」(morpho-phonemic change)、すなわち外部連声の現象を文字によって表記することはごくまれであった。Reiner は、そのような表記が起る例外的な場合として、「拘束された形式」(bound form) を含む合成語とか、固有名詞が節 (clause) によってなっているような場合があると言うだけである<sup>11)</sup>。von Soden も、“Krasis”<sup>12)</sup> という名称で同じような現象を説明しているが、固有名詞の Alabum ← Ali-abum 「父は何処？」のような場合や、否定詞 *lā* または願望助辞 (precativ) *lū* が母音ではじまる動詞形と結合する場合を挙げているだけである<sup>13)</sup>。しかしながら、次に記す最近の諸例は、アッカド語における語境界での外部連声の現象の存在を示している<sup>14)</sup>。

- (6) *ta-ba-an-na-akal ili* (BMS 12:31)  
 (7) *li-te-ed-di-li-ir-ta-ša* (Atra Hasis II. i. 19)  
 (8) *lū šul-ma-a-na muḥḥika* (Ug. V. Nr. 54:3)  
 (9) *Šaltam ibtani Ea ni-iš-ši-i-ki-ḫilu* (Ag. A V 28/30)  
 (10) *li-i-ti-i-li* (Ag. B II 16)

これらのテキストは、通常の文字表記の伝統に従えば、「形態文字素的」(morphographemic)<sup>15)</sup>に表記されるはずである。テキスト (6) は、いつものように文字表記の保守性<sup>16)</sup>が固持されていたならば、語根 \*bn' の動詞 G. pres. 2 m.sg. は当然、

(6a) *ta-ba-an-ni (akal ili)*

と表記されていたはずである。しかしながら、語末の母音 *i* と次の語 *akal* の語頭の母音 *a* との間に連声現象 (*i+a→a*) が起り、形態音韻論的变化がそのまま、音節文字表記されたわけである。これは

(6b) */tabanni+akal/→/tabannakal/ : <ta-ba-an-na-akal>*

と説明できるであろう。

テキスト (7) の場合は、通常では、*edēlu* 「閉ざす」の Gt. Pres. 3. f. sg + 願望助辞、すなわち *liteddil* が当然考えられる形であり、テキストはおそらく

(7a) *li-te-ed-di-il ir-ta-ša*

と表記されるはずである。しかし、語境界において「音韻的調整」(連声)が  
おこり、結果的に境界がなくなったため、二語が連続したものと  
して音節文字表記されたのである。すなわち、

(7b) /liteddil+irtaša/→liteddilirtaša/ : <li-te-ed-di-li-ir-ta-ša>

テキスト(8)は、よく知られている慣用句で、通常は、形態文字素的に

(8a) *lū šul-mu a-na muḫḫika*

と表記される。しかし、šulmuの末尾母音uとanaの初頭母音aの連声が  
起こり、その形態音韻論的变化を文字表記したのがテキスト(8)である。  
すなわち、

(8b) /šulmu+ana/→/šulmana/ : <šul-ma-a-na>

次にテキスト(9)の場合を考えてみよう。ここでは、*Ea ni-iš-ši-i-ki*が動  
詞ibtaniの主語で、*ni-iš-ši-i-ki*はEaと同格であるはずであるから、

(9a) *ni-iš-ši-i-ku ilu*

と表記されるべきである。しかし、niššikuの末尾母音uとiluの初頭母音i  
との間に連声現象が起こり、その形態音韻論的变化がそのまま音節文字によ  
って表記されたのであると考えることができよう。すなわち、

(9b) /niššiku+ilu/→/niššikilu/ : <ni-iš-ši-i-ki-/ilu>

その場合、文字表記のプロセスのなかで改行が行われたわけであるが、それは  
あくまでも文字表記上のことからあって、音韻形態には何の影響も及ぼさな  
い。

テキスト(10)は「拘束された形式」litと名詞の属格iliが、その語境界  
(+)を失なって連続した一つの音韻形態になった例である。それゆえ

(10a) *li-i-it i-li*

(10b) /li:t+ili/→/li:tili/ : <li-i-ti-i-li>

と説明できるであろう。

上の(6)~(10)に想定される母音連声をもう一度まとめて表にすると次のよ  
うになる。

(6c)  $i+a \rightarrow a$

(7c)  $\emptyset+i \rightarrow i$

(8c)  $u+a \rightarrow a$

(9c)  $u+i \rightarrow i$

(10c)  $\emptyset+i \rightarrow i$

これらの限られた例<sup>16a)</sup>から、あえて結論を下せば、アッカド語では、語境界

における母音連声 ( $V_1+V_2$ ) がおきた場合、 $V_2$  が  $V_1$  を常に「のみ込んだ」と考えることが可能である。すなわち、アッカド語の母音連声では、現代ギリシア語の場合のように母音の「強さ」ではなく、その「位置」が決定的な役割を果たしたと考えられるのである。すなわち、

$$(11) V_1+V_2 \rightarrow V_2$$

と定式化することができるであろう。

\* \* \*

ウガリト語における「連声」現象について最初に注目した学者は、C. H. Gordon である<sup>17)</sup>。彼によれば、「の前の 'a の喪失」という現象は、それに先行する語との「連声」sandhi の結果である。たとえば、

$$(12) \text{'}l / aqht. 'dbk \text{ (3Aqht obv. 21f./KTU 1.18:IV:21f.)}$$

は、それと並行関係にある

$$(13) \text{'}l [aqht] / t'dbh \text{ (ibid. 32f.)}$$

と比較するならば、〈dbk〉に、〈t'dbh〉と同じような、動詞 (\*db) の yqtl 形の存在を期待するのが最も自然な推論であろう。すなわち、〈dbk〉というアルファベット文字表記の背後に、1 人称の単数形 /a'dub-/ の存在を想定するのが、文脈上からも可能である。それで、本来そこにあるべきはずの /a/ が「連声」のゆえに ' の前で喪失したと Gordon は説明するのである。同じような説明が、次の例にもあてはまる。

$$(14) wank 'ny \text{ (137:28/KTU 1.2:I:28)}$$

ここでは、独立代名詞 〈ank〉に後続する動詞 〈ny〉に、動詞 (\*ny) の yqtl 形、1 人称・単数 /a'niy-/ の存在を期待するのが自然である。Gordon は、先行する語との「連声」のゆえに「の前の 'a の喪失」が起ったのであると説明する。そして、このような現象が、ヘブル語の例

$$(15) \text{נָאֵן} \text{ (列王記 I, 11:39)}$$

$$(16) \text{נָאֵן} \text{ (ゼカリヤ書 11:5)}$$

によって支持されると彼は考える。たしかにヘブル語文字表記にもとづいて判断するかぎり、נ (' ) の前の נ (' ) は、表記されてはいても発音されていない。しかしながら、נָאֵן の場合、後に見るように、動詞・未完了形の接頭辞 /a/ が ' の前で脱落したと考えることはできない。

このように、ウガリト語における「連声」現象に最初に注目したのは、Gordon であったが、彼はこの仮説を徹底的に追求して論述することは避けている。そのため、彼の立場は、他の学者によって必ずしも正しく理解されては

いないようである。たとえば、A.F. Rainey は、Gordon の立場と Ginsberg のそれを同一視して、次のように説明している。「pe-'ayin 動詞の場合、'の前の 'a の喪失は Gordon によって例証され、Ginsberg によって初めて認められた……。』<sup>18)</sup> しかしながら、彼は、Ginsberg のいう「重音脱落」(haplology)<sup>19)</sup> と Gordon のいう「連声」との相違を見落している。Ginsberg の場合、'の前の 'a の脱落は、先行する語が 'a (または a) で終わっている場合にのみ生起する現象で、他方、Gordon の「連声」という説明では、先行する語の末尾音が如何なる母音であっても 'の前の 'a の脱落が起ることを意味している。事実、(14) の場合、〈ank〉は母音 u で終わっていると考えられるから<sup>20)</sup>、想定しうる /a/ の喪失は、Ginsberg のように「重音脱落」(haplology) とは言えない。Gordon の説明と Ginsberg のそれに共通する点は、「'の前の 'a が、それに先行する語の末尾音の影響で脱落した」ということだけである。後(1958年)に、Ginsberg は、'の前の 1 人称の接頭辞 'a がウガリト語において「常に」脱落すると主張しているが、それがどういう理由で起ったのかは、もはや説明していない<sup>21)</sup>。

G.R. Driver は、この 1 人称の接頭辞 'a の省略を「書記の書き誤り」の結果おきたものであらうと考える<sup>22)</sup>。すなわち、文字素〈a〉が無意図的に脱落したために、形態素 /a/ が省略されてしまったとするわけである。しかしながら、文字素〈'〉の直前の 1 人称の接頭辞 /a/ を表記する文字素〈a〉が、いつも誤記されたと考えなければならない理由はない。

van Selms は、/a/ という音連続で、「'がもはや発音されなくなり、a が ' に shift した」<sup>23)</sup>と説明しているが、咽頭音 (pharyngal) ' に母音 a が “shift” したと考えるべき根拠は明らかではない。

以上を要約すれば次のようになる。Driver が文字素〈'〉の直前の〈a〉の脱落を「誤記」のゆえであると考えのに対して、Gordon, Ginsberg, van Selms 等は、それを形態素 /a/ の消滅と考えている。すなわち、Gordon 他は、/'の前の形態素 /a/ が何らかの音韻的理由によって消滅したために、文字素〈a〉がもはや表記されなくなったのであると説明しているのである。定式化すれば、

(17) 〈a〉→∅ / \_\_\_ 〈'〉 (pe-'ayin 動詞の場合)

が、自動的に

(18) /a/→∅ / \_\_\_ /'

を意味し、またその逆も真であると考えられるわけである<sup>24)</sup>。しかしながら、〈a〉

の脱落が 1 人称接頭辞の形態素 /'a/ の完全な消滅を意味するとしながら、なおかつ、<'dbk) や <'ny) を動詞の yqtl. 1 人称・単数形を示していると考えすることは、果して可能なのであろうか。pe-'ayin 動詞の 1 人称の接頭辞の場合、文字素 <' の直前の <a) の脱落<sup>25)</sup>は、必ずしも /'a/ の「完全な」消滅を意味してはいないのではないだろうか。このことについて、以下において具体的に考えていきたいと思う。

\* \* \*

まず、Gordon が「連声による、' の前の 'a の喪失」を説明しうるものとして引用しているヘブル語の二例 (15), (16) から検討していくことにしよう。

(15)  $\text{w}^{\text{a}}\text{a}'\text{a}\text{n}\text{n}\text{e}$  はローマ字転写をすると

(15a) <wa(')'anneh>

となり、音韻表示では (' は発音されないので)

(15b) /wa'anne/

となる。これは本来、接続詞 /wə/<sup>26)</sup> と動詞 (\*'ny) の Piel. impf. l.c. sg. /'ä'anne/ とから成っているが、shewa の法則<sup>27)</sup>、

(19) CaGă → CaGă (C: 子音、G: 喉音)

に従って、まず

(20) /wə'ä'anne/ → /wa'ä'anne/

となり、次に (15b) へと変化した。

(21) /wa'ä'anne/ → /wa'anne/

したがって、ここでは

(21a) a'ä → a

という音声変化が生じたことになり、Gordon のいう「' の前の 'a (ここでは 'ä) の喪失」を支持しているといえる。

しかし、二番目の例 (16)  $\text{w}^{\text{a}}\text{a}'\text{s}\text{i}\text{r}$  の場合はどうであろうか。ヘブル語文字表記に注目すると、(15)  $\text{w}^{\text{a}}\text{a}'\text{a}\text{n}\text{n}\text{e}$  の場合と同じく、ここでも  $\text{N}$  の次に(「下に」) 母音記号がなく、その前の  $\text{I}$  に母音 /a/ を示す記号 pataḥ がついている。(15) の場合は、表記されてはいるが発音されない(すなわち “historical spelling” の)  $\text{N}$  の存在は /'ä/ の喪失を暗示していたのであるが、(16) の場合もそのように /\*'a/ の喪失を意味しうるのであろうか。

まずローマ字転写をすれば、(16) は

(16a) <wa(')'šir>

となり、子音文字 <'> は “historical spelling” で発音されないから、音韻表

示は

(16b) /wa'si:r/

となる。これは、接続詞 /wə/ と動詞 (\*'šr) の Hif. impf. 1 c. sg /'a'si:r/ との結合によって生じたものである<sup>28)</sup>。したがって

(22) /wə+'a'si:r/ → /wa'si:r/

と表わすことができよう。この場合、Gordon の言う「連声による ' の前の 'a の喪失」は起っていないことが明らかである。(22) において変化したのは

(22a) ə'a → a

であるから、形態素 /a/ の一部だけが脱落したことになる。すなわち、(16) において “historical spelling” として表記されている  $\aleph$  は、/a/ の喪失を意味しているのではないことが明らかである。

では (15) と (16) に共通している重要な点は何であろうか。

それは、historical spelling としての文字素  $\aleph$  が形態素 \*/a/ の全部または一部の喪失を示しているということではなく、むしろ、この形態素とその直前の形態素との間に（すなわち、境界において）、共通の音声的変化が生起していることである。この境界における音声変化をもう一度記すと次のようになる。

(21b) a+'ǣ → a

(22b) ə+'a → a

これらは、次のような二つの段階で起った音声的変化として一般化できるであろう。すなわち、まず第一に、境界における、/ / の前の母音間子音 / / が脱落し、

(23)  $V_1+'V_2 \rightarrow V_1+V_2 / \text{---}'$

その結果、境界での母音連声が起った。

(5)  $V_1+V_2 \rightarrow \begin{Bmatrix} V_1 \\ V_2 \end{Bmatrix}$  ( $V_1, V_2$  のうち強い方)

すなわち、(21b) の場合は

$a+'ǣ \rightarrow a+\ǣ \rightarrow a (V_1)$

そして (22b) の場合は

$ə+'a \rightarrow ə+a \rightarrow a (V_2)$

のごとく、これらのヘブル語における母音連声は、現代ギリシヤ語の場合のように、(5) の規則を支持しているといえる。通常、ヘブル語において母音間子音 / / の脱落は随意的 (optional) である<sup>29)</sup>。しかし、子音 / / の直前では、強制的 (compulsory) に起こるものと考えられる。

Gordon は、「連声」の可能性を認めながらも、結果的には

(18) /'a/ → ∅ / \_\_\_ /'

という規則にこだわり、境界における「音韻的調節」としての連声現象に十分には注意を払わなかった。彼は、ヘブル語の例 (15), (16) にもとづいて、ウガリト語における「連声による、'の前の'aの喪失」の例を 'dbk (12) と 'ny (14) のうちに認めたのであるが、文字素 <a> の脱落 (17) を形態素 /'a/ の消滅 (18) と同じであると考えたために、連声現象そのものを無視することになってしまったのではないだろうか。それゆえ、Gordon の説明は次のように修正される必要があるだろう。すなわち、「境界における、/'/の前の母音間子音 /'/ が脱落し (23)、その結果生じた母音連声 (5) による音声的变化が、文字素 <'> の前の文字素 <a> の喪失によって表わされている」と。<a> の喪失は、この連声現象の結果をウガリト語アルファベット文字表記の原則にもとづいて表わしたために起ったのであって、形態素 /'a/ が何らかの理由で「消滅」したということの意味するものではないのである。

テキスト (12) の場合を具体的に考察しよう。ここでは、本来なら文字表記の伝統に従って形態文字素的に

(12a) <aqht. 'dbk>

と書かれるべき表現が <aqht. 'dbk> と表記されている。この <'> の前の <a> の喪失は、次のような連声変化の結果を反映しているのである。すなわち、(23) と (5) がここにも適用されると仮定すれば<sup>30)</sup>、

(24) /'aqhâtv + 'a'dub-ka/  $\xrightarrow{(23)}$  /'aqhâtv + a'dub-ka/  $\xrightarrow{(5)}$  /'aqhâta'dub-ka/

となる。この音声的变化の結果である /'aqhâta'dubka/ をウガリト・アルファベットで文字表記すると<sup>31)</sup>、<aqht'dbk> となるはずである。しかし、書記がアルファベット文字で表記していく過程で、/'aqhâta.../ を4つの文字素 <a> <q> <h> <t> の連続として表わした直後に、語分割符号 <'> を記したのは、何故であろうか。それは、「各々の語が独立したユニットとして表記されるべきである<sup>32)</sup>」という文字表記の伝統(保守性)に従ったためであると考えられよう。すなわち、ここでの語分割符号 <'> の存在は、純粹に表記上のことから、文字素表記 <aqht'dbk> を <aqht> と <'dbk> に分離しているのだから、形態音韻論的な形式である /'aqhâta'dubka/ を /'aqhâta/ と /'dubka/ とに分割すべきであるということの意味しているのではないのである。

以上のことは、アッカド語の例によっても支持される。たとえば、二つの形

態素、/mat/ と /šu/ が結合されるとき、子音連声 ( $C_1+C_2$ ) が起り

(25) /mat+šu/ → /massu/

となる。この音声の変化の結果 (/massu/) は、アッカド語の音節文字表記によって、〈ma-su〉または〈ma-as-su〉と記された。しかし、後代になって、それは〈mat-su〉または〈ma-at-su〉と表記されるようになった<sup>32a)</sup>。しかし、だからといって、〈mat-su〉または〈ma-at-su〉が /massu/ でなく /matsu/ を意味していると考え、それを /mat/ と /su/ という二つの「形態素」の結合とみなすことは適切ではない。このことをウガリト語の場合と比較して図式すれば次のようになるであろう。

(26) /'aqhâtv+'a'dubka/ → /'aqhâta'dubka/ : 〈aqht'dbk〉 →

〈aqht. 'dbk〉 ≠ /'aqhâta/+/'dubka/

(27) /mat+šu/ → /massu/ : 〈ma-su〉 または 〈ma-as-su〉 →

〈mat-su〉 または 〈ma-at-su〉 ≠ /mat/+/su/

このように、ウガリト語の〈aqht. 'dbk〉は形態音韻論的变化 /'aqhâta'dubka/ のアルファベット文字表記であり、〈'〉の前の〈a〉の喪失は、(23) によって /' が脱落した後に、

(28) v+a → a

という母音連声が起ったことを示しているのである。

次に、テキスト (14) *wank 'ny* の場合は次のように説明できるであろう。〈wank'ny〉(語分割符号〈·〉なし)は、

(29) /wa'anâku+'a'nîyu/ → /wa'anâku+a'nîyu/ →

/wa'anâka'nîyu/

という音声の変化の結果を文字素表記したものであって<sup>33)</sup>、本来は、形態文字素的に〈wank a'ny〉と表記されるべきものである。文字素〈a〉の喪失は、(23) によって /' が脱落した後に、

(30) u+a → a

という連声現象が起ったということを反映しているのもあって、(18) のような形態素 /'a/ の消滅を意味しているのではない。

同様の現象がウガリト語テキストの他の箇所にも認められるであろう。たとえば、

(31) *tn. b'l. w'nnh*

*bn. dgn. arîm. pđh* (137:35/KTU 1.2: I: 35)

"Give up Baal *w'nnh*,

## Dagon's Son, that I may dispossess his gold !"

における〈w'nnh〉は、本来は〈wa'nnh〉と表記されるべきものであるが、〈'〉の前の文字素〈a〉が連声現象を反映して喪失した結果であると考えることができるのではないだろうか。ウガリト語の'nnの語源的解釈に関しては、従来、次のような6つの異なる説明が提案されてきた。

- (32) (I) 'nn "to bring", "to attend", "to present" (Arabic)  
 (II) 'nn "cloud" (Hebrew)  
 (III) 'nn "to recite charms" (Hebrew)  
 (IV) 'ny "to be afflicted" (Hebrew)  
 (V) 'wn "to aid", "to assist" (Arabic)  
 (VI) 'wn "to reside" (Hebrew)

ほとんどの学者は、テキスト(31)の'nnを名詞ととり、「(バアルの)従者たち」のごとく訳している。しかし、van Selmsは、そのテキストの並行法の構造に注目して、〈w'nnh〉に動詞(\*ny)のD.語幹、yqtl. 1c sgの存在を想定し、それが動詞arī(-m) [\*yrt, G. yqtl. 1.c. sg]と並行関係にあると考える<sup>34)</sup>。Ginsberg<sup>35)</sup>と Held<sup>36)</sup>も、「動詞説」をとっている。しかしながら、明確な音韻論的理由付けは与えられていない。

ここで〈w'nnh〉は、本来は〈wa'nnh〉と文字素表記されるべきものであったが、〈'〉の前の〈a〉が連声現象の反映として喪失したためにそのような表記になっていると説明することができる。すなわち、〈w'nnh〉は、

- (33) /wa+a'annēn(na)hu/ → /wa+a'annēn(na)hu/ →  
 /wa'annēn(na)hu/

と音声的に変化した形態音韻論的形式をアルファベット文字表記したものである。この場合も、〈'〉の前の〈a〉の脱落は、形態素 /a/ の消滅(18)を意味しているのではない。この音声的変化の結果だけを見るならば、/a/ が消滅したように見えるかもしれないが、むしろ、/l/ が母音間で脱落した後に

- (34) a+a → a

という連声、すなわち母音の「融合」が起きたと考える方が賢明であろう。

最後に

- (35) p'bd. an. 'nn. arī  
 p'bd. ank. ahd. ulī (51: IV: 59-60/KTU 1.4: IV: 59-60)

における'nnについて考察しようと思う。ほとんど全部の学者がこの'nnを名詞ととって、'nn. arīを「アシェラの従僕」のように訳出している<sup>37)</sup>。筆者

の知る限り、M. Held だけがここでの 'nn を動詞ととる。彼は、これらの行と次の数行が、いわゆる「二重の修辭疑問」(double rhetorical question) になっていることに注目して、テキストを

(36) *p'bd. an. 'nn. aṣrt*

.....

*hm. amt. aṣrt. ḫbn | ḫbnt (ibid, 59~62)*

と分析し、

(36a) "Am I a slave that I should attend Asherah

.....

or is Asherah a handmaid that she should make bricks?"

と訳出している<sup>38)</sup>。したがって、Held は <'nn> に動詞の yqtl. 1.c. sg 形の反映を認め、それが *ḫbn* (\**ḫbn*. G. または D. yqtl. 3. f. sg) と並行関係にあると考えていることになる。しかし <'nn> を動詞ととることに關して、テキスト (31) の 'nn を "to lord over" と訳す Ginsberg の説を引用しているだけである。

我々は、ここでテキスト (35) における、'nn // *aḥd* という並行関係に注目したい。通常は、*aḥd* は、動詞 (\**ḥd*) の分詞形 /'aḥid-/ と解釈され、"the holder (of a trowel)" (Gordon) 等と訳されている。しかし、*aḥd* は、動詞の yqtl. 1.c. sg. /'aḥudu/ (<\*/'aḥudu/) と考えることが可能であるので<sup>39)</sup>、Held の注目している 'nn // *ḫbn* と考え合わせて、ここでの <'nn> の背後に yqtl. 1.c. sg. /'a'nun-/ または /'a'ūnan(na)/, の存在を想定できるのではないかと思われる。/'a'nun-/ は、語根を \*'nn (32-I) "to attend," "to present" とした場合の G. yqtl. 1.c. sg 形で、後者 /'a'ūnan(na)/ は、語根を \*'wn (32-V) "to aid", "to assit" と考えた場合の G. yqtl. 1.c. sg. enclitic 形である。ここでは、後者の方が、文脈によりふさわしいと考える。

さて、当該テキスト (35) においても、すでに見てきたような /' の前の母音連声が起っていると考えられるのではないだろうか。すなわち、<'nn> における、本来そこにあるべき <a> の脱落は、連声変化

(37) /'ani + a'ūnan(na)/ → /'ani + a'ūnan(na)/ → /'ana'ūnan(na)/

を反映しているのである。文字素表記 <an'nn> の <an> と <'nn> の間に語分割符号 <·> が記されているのは、すでに見たテキスト (12) の場合と同じく、「文字表記の保守性」のゆえである。それは、あくまでも純粹に表記上の現象であって、文字素 <·> が音素形式 /'ana'ūnan(na)/ を二つの語、/'ana/ と

/ʿūnan(na)/ とに分割しているということではない。

さらに、〈pʿbd. an〉を“Am I a slave?”と訳し、〈an〉と次の〈nn〉の間に「統語的な休止」の存在を認める場合、〈an〉と〈nn〉の間に表記されている語分割符号〈·〉は、「音声的休止」の存在をも示していると考えることができよう。その場合、/ʿani/ と \*/aʿūnan(na)/ との間（語境界）における「音韻的調節」（連声）の存在を想定することは、困難に思われるであろう。すなわち、〈nn〉の背後に (37) の連声変化による〈a〉の脱落を考えることはむづかしい。にもかかわらず、このような一見不可能にみえる現象がアッカド語の例にも認められる<sup>40)</sup>。たとえば、すでにみたテキスト (9)

*ni-iš-ši-i-ki-īlu*

の場合、〈ni-iš-ši-i-ki〉と〈īlu〉の間に、文の終りと始まりという「統語的な休止」があるだけでなく、改行という大きな表記上の一時的な断絶があるにもかかわらず、語境界における「音韻的調節」（連声）が起っているのである。上記ウガリト語の場合も、語分割符号〈·〉の存在は、連声現象の存在を否定するための大きな要因とはならないのではないだろうか。したがって、本テキストにおいて

(38)  $i+a \rightarrow a$

という母音連声を想定することができるであろう。以上の議論にもとづいて、我々はテキスト (35) を次のように訳出したい。

(35a) “And am I a slave that I should assist Asherah?

And am I a slave that I should hold a trowel?”<sup>41)</sup>

以上4つのウガリト語テキスト (12), (14), (31), (35) に認められた母音連声をまとめて挙げると、

(28)  $v+a \rightarrow a$

(30)  $u+a \rightarrow a$

(34)  $a+a \rightarrow a$

(38)  $i+a \rightarrow a$

となる。ここで、ウガリト語において連声規則 (5) が適用されるものと仮定してきたことの是非について述べておきたい。上の4つの連声現象をみるかぎり、ウガリト語の場合も、アッカド語の場合と同じく、連声規則 (11) が働いていると考える方が適切であるように見える。しかし、それらは  $V_2$  が  $a$  であるような例に限られているために、実際に (5) か (11) のいずれの規則が適用されたのかを決定することは不可能である。いずれにしても、ウガリト語に

おける「連声現象」の存在の可能性を、以上の4テキストに見ることは妥当である。

\* \* \*

このように、古代ウガリト語のアルファベット文字表記によるテキストにおける、文字素と音素（または音節）との関わりを有機的にとらえることによって、ウガリト語における「連声」の存在の可能性をつぎとめることができる。文字素表記を、ただ機械的なルールに従って発音 (vocalize) するだけでは十分ではない。個々の語を文脈のうちに正しく位置づけることとともに、連声のような、形態音韻論的事実にも（もし文字素表記の分析からそれが可能であるならば）注意を払うことが、古代テキストの理解にとって不可欠なことがある。ウガリト語独自の現象としての、三つの所謂「母音文字」、〈a〉, 〈i〉, 〈u〉の存在が、文字と音の関係の適切な理解に役立つものでなくてはならないのである。  
(1982. 9. 27.)

\* 本論文は、1982年7月8日、ロンドン大学での国際アッシリア学会 (*Rencontre Assyriologique Internationale*) で発表した研究にもとづいている。英文原稿に目を通して有益なご指摘をして下さった H. Rosén 教授に特に感謝の意を表わしたい。

- 1) J. デュボワ他著「ラルース言語学用語辞典」(大修館 1980), 419頁。
- 2) これを+で記号表現する。
- 3) L. Bloomfield, *Language*, 1933, 1961, p. 187.
- 4) 後で扱う現代ギリシア語の例(3)をみよ。なお、K.L. Pike は連声 (sandhi) を次のように定義している。“The mechanical substitution, addition, or dropping of one or more phonemes in a morpheme, caused when two words come together in phrases.” (*Phonemics*, 1947, p. 249) そして、語の内部での連声を内部連声 (internal sandhi) と呼び、語と語の間での連声を外部連声 (external sandhi) と呼んで区別している。
- 5) F.W. Householder, *Linguistic Speculations*, 1971, p. 349 は連声 (sandhi) を “phonological adjustments at boundaries” と簡潔に定義している。
- 6) W.S. Allen, *Sandhi: The Theoretical, Phonetic, and Historical Bases of Word-Junction in Sanskrit*, 1962 は、サンスクリット語における連声現象を (1) V+V, (2) V+C, (3) C+V, (4) C+C の4つに分類して論じている。
- 7) P.H. Matthews, *Morphology*, 1974, pp. 97-115.
- 8) J. デュボワ他著「前掲書」, 371頁。
- 9) Matthews, *ibid.*, p. 105. このように、Matthews は “dynamic concept of ‘fusion’” を提唱するのである。
- 10) Matthews, *ibid.*, p. 113.
- 11) E. Reiner, *A Linguistic Analysis of Akkadian*, 1965, p. 105.
- 12) 「ギリシア語において、単語の末尾の母音あるいは二重母音が次の母音あるいは二重母音と縮音すること。」(「ラルース言語学用語辞典」371頁)
- 13) W. von Soden, *Grundriss der Akkadischen Grammatik* (=以後 GAG), 1952, p. 18 (§ 17). Also p. 15f (§ 14).

- 14) 次の諸例 (6)~(10) は、すべて Reiner (1965) 以降に発表された論文から収集された。すなわち、(6) は W. von Soden, "Zur Wiederherstellung der Marduk-Gebete BMS 11 und 12," *Iraq* 31 (1969), p. 85f. (7) は W.G. Lambert & A.R. Millard, *Atra-Hasis: The Babylonian Story of the Flood*, 1969, p. 72. (8) は P.-R. Berger, "Zu den 'Akkadischen' Briefen Ugaritica V," *UF* 2 (1970), p. 290. (9) と (10) は B. Grégoire-Groneberg, "Abriss eines Thematischen Vergleichs zwischen CT 15, 5-6 und CTA 24=UT 77", *UF* 6 (1974), p. 65. no. 6.
- 15) 「文字表記は必ずしも形態音韻論的变化 (morphophonemic change) を再生しない。『形態文字素』 ('morphograhemes) を使用する。」という、E. Reiner, *ibid.* p. 105 の指摘を参照せよ。cf. § 5.1.
- 16) 文字表記の保守性 (orthographic conservatism) については、たとえば R.D. King, *Historical Linguistics and Generative Grammar*, 1969, p. 209 を参照。
- 16a) 連声現象が文字表記される場合が少ないのは、前注で見た「文字表記の保守性」のゆえであって、実際の発音において連声がまれにしか起らなかったということではない。
- 17) C.H. Gordon, *Ugaritic Manual*, 1955, §5. 30 (p. 29), no. 1.
- 18) A.F. Rainey, "Observations on Ugaritic Grammar," *UF* 3 (1971), p. 168.
- 19) H.L. Ginsberg, "The Epic of  $\text{לְמַלְכֵי־בְּנֵי־יִשְׂרָאֵל}$ ," *Tarbiz* 4 (1932), p. 114 (in Hebrew). 彼はそこで 49: II: 22/KTU 1.6: II: 22 の 'dbnn について、本来 a'dbnn であったのが haplology のゆえに 'dbnn となったと説明しているだけである。
- 20) 独立代名詞 (ank) の発音として /'anaku/ が適切であろうことは、音節文字 (アッカド語楔形文字) 表記によるウガリト語テキストに見られる <a-na-ku> によって支持される。Gordon, *UT* p. 362 (§ 19. 249).
- 21) H.L. Ginsberg, "An Unrecognized Allusion to Kings Pekah and Hoshea of Israel (Isa. 8: 23)," *Eretz Israel* 5 (1958), p. 62\*.
- 22) G.R. Driver, "Some Uses of QTL in the Semitic Languages," *Proceedings of the International Conference on Semitic Studies*, 1969, p. 64.
- 23) A. van Selms, "Yammu's Dethronement by Baal", *UF* 2 (1970), p. 259.
- 24) 文字素 <a> は、/a/ だけでなく /a/ や /a'/ をも表記しうるのであるが、pe-'ayin 動詞の 1 人称接頭辞を意味する場合は、<a>=/a/ と考えるべきである。
- 25) F. Gröndahl, *PTU*, p. 17 は、pe-'ayin 動詞の 1 人称接頭辞が関わっていない場合にも、<'> の直前の "Alef" の脱落の可能性を認める。例えば、人名 <nb'm> は /nb'+m/ を意味すると考えている。
- 26) もし、"waw consecutive" であるなら、未完了・1 人称の /' / の直前であるから /wā/ となるはずである。
- 27) T.O. Lambdin, *Introduction to Biblical Hebrew*, 1971, p. xxi. を参照。
- 28) H. Bauer-P. Leander, *HGHS*, p. 353; C.F. Keil, *Zechariah*, p. 359 を参照。しかし、H.G. Mitchell, *Haggai and Zechariah (ICC)*, p. 312. は、 $\text{וְיָשִׁיר}$  を  $\text{וְיָשִׁיר}$  の「語中音消失」(syncope) と説明しているが、 $\text{וְיָשִׁיר}$  は  $\text{וְיָשִׁיר}$  (wa+'a'sir) の二次的变化と考えるべきである。
- 29) たとえば、 $\text{לֹא־אֲדֹנָי} \rightarrow \text{לֹא־אֲדֹנָי} \rightarrow \text{לֹאֲדֹנָי} \rightarrow \text{לֹאֲדֹנָי}$ . Bauer-Leander, *HGHS*, § 25h 参照。
- 30) 本論文におけるウガリト語の発音 (vocalization) は、一応、Gordon, *UT* に見られるように、比較言語学の方法にもとづいて再構された想定形によっている。ただし

母音が特定視できない時は *v* と記すことにする。(a) については注 24) を参照。

- 31) 通常、子音文字は、子音音素のみ (c) か、子音音素とそれに後続する母音 (cv) を表記する。
- 32) Reiner, *ibid*, p. 105.
- 32a) Reiner, *ibid*, p. 56.
- 33) 多くの学者は、⟨ny⟩ を絶対不定詞 /'anāyu/ か分詞 /'āniyu/ ととっている。しかし文脈から判断すれば、ここに動詞の *yaqtul* 形の存在を想定するのがいちばん自然である。もし絶対不定詞であったら、語順が *w'ny+anš* となるのが普通であろう。Gordon, *UT*, p. 80.
- 34) van Selms, *UF* 2 (1970), p. 259f. 彼はこのテキストを "Give Baal that I may humiliate him," と訳している。
- 35) H.L. Ginsberg, *ANET*, 1955, p. 130: "Give Baal to me to lord over." しかし、彼は 1944 年には "Surrender Baal and his servants!" と訳していた。"Baals' Two Messengers," *BASOR* 95 (1944), p. 27. no. 8.
- 36) M. Held, "Rhetorical Questions in Ugaritic and Biblical Hebrew", *Eretz Israel* 9 (1969), p. 72, no. 15.
- 37) Gordon, Ginsberg, Albright, Gaster, Caquot, Sznycer & Herdner, Gibson, Mendenhall, Mann, Good, Watson, van Zijl 他。
- 38) Held, *Eretz Israel* 9, p. 72. (波線は筆者による。)
- 39) J. Sanmartin, "Zum orthographischen Problem der Verben I," *UF* 9 (1977), p. 260, no. 13 は、'nt: V: 30/KTU 1.3: V: 22 の *ahd* を /'āhūd-/ と説明している。ただし、*UT* で Gordon は、*ahd* と読んでいる。
- 40) もちろん「誤記」の可能性がないわけではない。
- 41) *ulē* の解釈として次のような立場がある。"trowel" (Gordon), "carpenter" (Albright), "tool" (Watson) 他。